



峠付近は富士山の眺望も趣があり、その昔の山城跡が今も見られる。

れ「御坂峠」の道標に従い進むとその先に小さな鉄製の橋が見えてくる。この橋を渡ったところから古道らしくなってくる。しばらく進むと「かたくり群生地」の看板がある。春にはこの辺りにあの淡い紫の花が咲き乱れるのだろうか。

勾配のきつい道を5分ほど歩いたところで大木に出会う。見るからに歴史があると感じさせる大木である。道はいよいよ峠を目指して進む、やがて木立の中に「行者平」の看板が

見えてくる。朽ち果てそうな看板に、昔の行者が修行した跡と書かれ、そこには大きな自然石の上に三体の石仏が載っている。富士山信仰の伝説がある「役」の行者である。ここにそんな言い伝えが残っていても不思議はないだろう。行者平が峠までの中間点。看板には、ここから峠まで5分と記されている。

行者平をあとにしてすぐの所にある「馬頭観音の碑」を過ぎたところから、道幅が狭がり、所々に残る石畳がかつて街道であったことを物語るようにしえの人たちがこの石畳を踏みしめて文化や情報を伝え、生活を営み、文化を築いてきたのであろう。

石畳の感触を確かめながら登ると馬頭観音であろうか、一体の石仏がある。陽に当たった顔が優しくほほ笑みかけているようである。さらに歩みを進め、小石が積み重なった「子持ち石」を過ぎると、峠まではあと一息となる。

峠は少し開けた平坦地で、右に富士山、左に三ツ峠、正面に河口湖が望める。しばらくは眺望を楽しみ、一息入れる。

峠に立つ解説板には、ここがその昔山城であったことが記されていて、散策すれば空堀跡が確認できる。この城は鎌倉往還の要所として戦国時代に北条氏が築いたものと言われて

いるが、延々と流れてきた歴史にあらためて感動を覚える。

峠をあとにして河口湖方面へと下っていく。

20分位下ったところで二人の外国人と出会う。聞けば「山梨百名山」の制覇を目指しているそうで、黒岳からの下山途中であるようだ。ひとりにはアメリカ人、もうひとりカナダ人、日本の古道で外国の若者と出会えたことが妙にうれしい。峠から40分位で新御坂トンネルの出口付近に下りる。

新御坂トンネルは、郡内と国中を結ぶ幹線道路。約二時間半をかけて歩いた山道も、新御坂トンネルを通れば車で約三分半。走り過ぎる車の音に、時代の移り変わりを実感した。



その優しく穏やかな顔で旅人を見守る石仏。



山梨の旧道を訪ねて

一道一会
(笛吹市・富士河口湖町／御坂峠)

その昔、鎌倉往還の最大の難所と言われた御坂峠は、いにしえのにぎわいも消え失せ、わずかに残った歴史の面影が、訪れる人を静かに迎えてくれる。新御坂トンネルの笛吹市御坂町から峠へ向かう山道を歩いた。

御坂峠

坂峠と聞くと太宰治の「富嶽百景」や、昭和42年に開通した新御坂トンネルを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

御坂峠は、甲府盆地と御殿場・駿河方面を結ぶ、かつては鎌倉往還と呼ばれた街道が御坂山地を越えるところで、街道の最大の難所として知られていた。

今回訪れたのは鎌倉往還の面影をわずかに残す、笛吹市御坂町藤野木から新御坂トンネルの富士河口湖町側出口まで、約2時間半の旧道である。藤野木から峠へ向かう山道は、いきなり急勾配となり、人の気配のない屋まだ暗い道である。登り始めてすぐ左手に「藤野木のオオバボダイジュ」の解説板がある。これには、日本における分布の南限に当たるので、植物分布上きわめて貴重な存在であることが記されている。その「オオバボダイジュ」をあとにして幅2メートルほどの道に登る。昔の街道の雰囲気はないが、太陽と木々が織りなす明暗の横じまが道に不思議な模様を映し出している。

30分ほど歩くと、道は二手に分か



幾千万の旅人と出会ったと思われる、峠へ向かう山道にたたずむ大木。



周囲の風景に不思議と溶け込んでいる小さな鉄製の橋。